巻　頭　言

地球上の多様な個別性を：文化人類学からの視点

●福井勝義（京都大学総合人間学部教授）

エチオピアの西南部における牧畜・焼畑社会ボディに村入りしてから，27年になる。当時4～5歳の子どもたちが30歳になり，結婚し子どもをもつようになる。昨年末に訪れると，そのころの娘が祖母になっていた。いつのまにか，私は彼らの人生と自分を重ねあわせて考えるようになってしまった。

思い返せば，私がこれまでひとつの社会に延べ半年以上の住み込み調査をしたのは，つぎの四つの地域になる。1964年から1年間タンザニアの半農半牧社会イラクに，69年から70年にかけて延べ半年間四国の焼畑の村に，おもに73年から76年の1年半近くボディ社会に，81年から85年にかけて延べ半年間スーダン南部の牧畜・焼畑社会ナーリムに滞在した。そのほか，卒論では「土壌微生物坦子菌の生態学的調査」や修論では現地で収集したおびただしい栽培植物の変異を整理した「エチオピアの栽培植物の研究」をまとめ，また90年代では北タイ，ラオス，ベトナムで焼畑を広域に見てまわっている。

こうした遍歴は，文化人類学の分野では異例かもしれないが，それがいまでは自分なりの見方を育ててくれたと思っている。文化人類学の特徴が「土からコスモロジーまで」というホーリズムとして社会をとらえることであるなら，この領域へのアプローチは，むしろ異質の分野をまたがっていくことで新たな視点がみえてくることがある。

「20世紀は分析の時代であった」ということをよく耳にする。それによって科学技術は発達したが，科学的分析というのは基本的に諸条件を「ぶつ切り」にすることによって成り立つものである。できるだけ条件を単純化して，因果関係を見いだしていくのである。ところが，自然をふくむ人間社会は，けっして「ぶつ切り」ではなく，さまざまな要素や条件が複雑に絡みあって存在し動いている。長期間のフィールドワークをもとにその複雑な「土からコスモロジーまで」をどのように絡みあわせて，対象社会の特徴を浮き彫りにしていくか。ここに，文化人類学のユニークさがあるように思われる。

最近では，「21世紀は統合の時代である」と叫ばれるようになっている。さまざまな分野の分析結果を統合し，新たな地平線を見いだしていくことである。それは，一方では「物理の世界」から「生物の世界」への流れとも対応している。「文化をもつ生物」としての人間社会は，生物社会の中でももっとも複雑であろう。生物にもそれぞれの歴史が存在するが，地球上の6000にもおよぶ民族社会における歴史の重みは，私たちの想像をこえるものがある。ここに，人間社会をモデル論的にみなしていくことのむずかしさがある。それを打開するためには，個別な社会，さらにはそれらが絡みあっている地域をできるだけトータルに描きだしていくことではないだろうか。単位の取り方はいくつかあるかもしれないが，地球上の多様な個別性を大切にしていく視点こそ重要と思われる。